1-07 陳述を並列させる

1. 「同質」の陳述を「並列」させる

以下の研究目的は並列関係に整理できる。そのように修正せよ。

① 家庭での子育てに対する、年代ごとの意識の差を明らかにする。
② 子育ての役割分担意識は、年代別に、どのような差があるか。
③ 子育ての役割分担意識は、性別により、どのように現れるか。
④ 男性、女性、それぞれが家庭での子育てに対して持っている意識の現状を明らかにする。

2. 並列させた陳述を数え上げる方法

以下の文はどの陳述が並列関係にあるのかが見えづらい。整理して読み取れるよう文を修正せよ。

例文 1

留学生である筆者にとって、日本のお中元、お歳暮は、賛嘆に値する習慣である。目上の人に対して日頃の感謝やご無沙汰のお詫びを、一斉に贈り物によって表現できるのだから、まだまだ「縦社会」である日本には便利な習慣である。一人暮らしの年寄りに対して季節の贈り物をすることが出来るので、「高齢化社会」に向かう日本では必要な習慣である。ある日、知人から心のこもった贈り物が届くというのは誰にとっても嬉しいものである。

例文 2

第 2 節　お中元、お歳暮が社会にもたらす利益

日本のお中元、お歳暮の監修が日本社会にとってどのような利点をもたらしているのだろうか。贈り手および貰い手にとって有用である。贈り手は日頃お世話になっている人に対して、直接出向いて感謝の気持ちを述べるべきところ、物を贈ることで代替できる。貰い手は、訪問によって時間が割かれることがなく、実用的な物をもらうことができる。経済を活性化している。お中元・お歳暮用の商品が作られ、それが生産者から卸売業者、小売業者、貰い手という順で流通する。配達アルバイトなどの期間限定の労働需要も発生させる。

このようにお中元・お歳暮の監修は、消費者にとっても業者にとっても有益で、日本社会に利点をもたらしている。

例文 3

日本社会におけるお中元、お歳暮の習慣

お中元、お歳暮の習慣は見直されるべきである。日本社会の変化を認識し、お中元、お歳暮の習慣が時代に合わなくなっている。

現代は個人の趣味や志向が多様化し、贈られる側の趣味や志向を把握することが難しい。カタログギフトが重宝されるのはその表れである。相手の好みの贈り物を選ぶことが困難なことから贈る側は精神的に負担を感じる。贈られる側にとっても、趣味や志向に合わないものをもらったときには負担になる。

日本は世界でも優秀の豊かな国となりモノが溢れている。モノを揃えることよりも、いかにモノを減らしてスッキリと暮らすかということを特集した書物が流行るぐらいである。こうした「モノ余り」の社会の中で、実用品を貰うという喜びは、以前と比べて薄くなっている。